芭蕉の句に「鬢に霜の髭四十一」と云ふ有りしかれば白氏の此詩胸中に絶えざりしか

していかに其道を得べけんやと、爰に不審も有るべきか。さるを尋常の師の門人に示すと異なるは、白氏文集樂天が聞龜兒詠詩あり曰く、怜渠已解弄詩章、搖膝支頤學二郎、莫學二郎吟太苦、年纔四十髮如霜。又笈の小文紀行に曰く、百骸九竅の中に物あり、かりに名附て風羅坊と云ふ、誠にうすものゝ風に破れやすからん事を云ふにやあらん、彼れ狂句を好む事久し、終に生涯のはかりごとゝなす、或時は倦んで放擲せんことを思ひ、或時は進んで人に勝たんことを誇り、是非胸中にたゝかうて是が爲に身安からず、暫く身を立てん事を願へども、これが爲にさへられ、暫く學んで愚を曉さん事を思へども、是が爲に破られ遂に無能無藝にして唯此一筋に繋がる（下略）。是に思ひ合すべきか○師走袋に門人の餞に遣しけると有り。眞桑二に別れては必ず合はざるもの也ければ、我と其方には似ざれとなり。別るゝ事を歎ずるの句なり○按ずるに師走袋の說心低きにや

破瓜は水あげなり、俗語には桃弄なり、元政知らずて聖德太子の事に使ひたり、笑ふ可し

發句集元祿七年とす

○深草元政が聖德太子十六歲の畫讚に、和南二八破瓜時、これを見る時は門人の才智を云へるにや。

瓜の皮むいた所が蓮臺野

元祿七年の句にや、笈日記京都の部に、去年の夏なるべし、去來別墅にて「朝露によごれて涼し瓜の泥」といふ句の次に、人々つどひ居て、瓜の名所いとあまた言ひ出でたる中に「瓜の皮むいた所や蓮臺野」と見えたり。是元祿八年の詞に去年といへる故、元祿七年にして、朝露の句と同時にや未だ詳かならず○似鳩覺え書に知足亭と前書有り。

山陰や身を養はん瓜ばたけ

元祿三年の俳番匠に有り。前書は美濃に入りて、と見えたり○瓜畠集に落梧何がしの招きに應じて、稻葉山松の下涼しく、長

途の愁を慰むほどに、と前書有り○この瓜畠集は美濃國岐阜の住落梧がかねて撰集思ひ立ちけるに、其志成らずしてすたれん事を惜みて、支考が笈日記に出せるものなり。

朝露によごれて凉し瓜の泥

元祿七年の吟なり。笈日記元祿八年の詞に、去年の夏なるべし去來別墅にありて「朝露によごれて凉し瓜の泥」とあり○元祿七年の續猿蓑には、瓜の土、と見えたり○自得發明辨に、一とせ俳諧せし時、瓜の泥によごれたるはをかしとて、六句目に、泥によごるゝ瓜の畑の日、と云ふ句せし其次の年、翁の句に「朝露によごれて凉し瓜の泥」と云ふ句出でたり。はじめて發句の道具たる事を知れり○泊船集は續猿蓑と同じく、瓜の土、とあり○喪の名殘には、瓜の泥、と見えたり○赤草紙に、此句は瓜の土と始め有り。凉しきと云ふに活きたる所を見て泥とはなしかへられ侍る。

子供等よ晝顏咲きぬ瓜むかん

何れの年の吟にや未知。泊船集に見えたり○古今抄に三字切「子ども來よ晝顏咲きぬ瓜むかん」三字に三別の用有りて、夫を名目の所詮といはれん、下略○むつちどりにも此句見えたり○泊船集にもあり。

晝顏に晝寢せうもの床の山

何れの年にや未だ定かならず。韵塞に東武吟行の頃、美濃路より李由が許へ文のおとづれに、とあり○古今抄に疊字の格「奈良七重七堂伽藍八重櫻」「晝顏にひる寢せうもの床の山」右二章を疊字の格とは、和漢に此名の例ありて、詩歌の一體となせるより、疊語はみよしのゝ芳野とよめる類なり。然れば前章は七

發句集元祿五年とす

床の山は江州彥根の東に在り、則原村五老井許六が庵の邊なり、
天智天皇
いぬかみのとこの山なるいさや川いさとこたへて我名もらすな

草津、守山は江州

七と重ね七重八重と疊みたれば、例に切字の論に及ばず。しからば疊語の格ともいはんか。後章は白馬の類説に、此句は晝寢せうものを、と例の遠廻しを略せしに似たれども、其意ならば晝顔の名に對して晝寢せましを、床の山なればと床の字に歎ずべけれど、是は現成體にして、晝顔は咲けど床の山ならば晝寢せうもの、とすなほに聞くべし。是らや疊字の格ならん。下略

○頭陀物語に曰く、翁一とせ草津守山を過ぎて、松陰に行きやすらうて、かたへを見れば、色白き乞食の草枕涼しげに臥はれやかに蹴やりて、高麗の茶碗のいと古びたるに瓜の皮拾ひ入れ、破れし扇に蠅追ひながら、一ねぶり樂しめる也。あやしく立ちどまり問ひ寄り給へば、眼をひらき、又ふさぎ、鼾倘もとの如し。さは何者のはふれにたる、おして名を聞かまほしく、目のさむる迄腰うちかけて「晝顔に晝寢せうもの床の山」折からの吟も此時なり。所は琵琶の海近く、比良根颪薫り來れば、並木の古葉こぼれかゝりて、蟬の聲あたりを去らず、涼しと思ふ程に、空たけたり。をのこずと起きあがり、何夢や見つらん、膝を打つて獨り笑み居たる、猶ほゆかし。松風聞了ヶ午睡濃ナリとは悟れる人の口ずさみなるを今此人を見る事よと、こゝろおきせられて、近く寄りてしかじかのあらましを問ふ。をのこいとをかしがりて、君の寶を發すものは劍の下に眼をふさぎ、親の寶を發す者は松原に袖を乞ふと、我その袖を乞ふものなり、只今出口の柳を潛つて、襟にひやりと覺えたる夢は、鵙の蓺にてありしものを、むかしを手枕に樂む身は、珍味の舌打より、瓜の皮の蛾を拂つて朝夕無味の禪にほこる、御坊も知らざる所なりと、白き齒をあらはして笑ふ。翁荷へる晝笥を開きて、此飯の白く味殊にすぐれたるも、人の食を乞へるはおなじ、我も又乞食なり、たとへば和らかなる褥に夢見、こまかなる絹に身を裹むも、元より我物に非ずと知らば、此松が根も相同じく、かつげる薦もひと

しからん、只元を知ると知らざると、實に見ると假に見ると、是を迷悟の二淺とも云ふ。をのこもし我に隨はゞ、茶碗を旅籠屋の膳にかへ、菰を假著の小袖にかへ、郞の夢を風雅にかへて、老の杖をたすけよや、樂み又其中にあらん、をのこ領いて翁にむかひ、其甞箇を給らんと、淸水をひたして是を食ふ、首を叩て曰く、誠に此飯五味を欺き、咽に甘露を通すが如し、實に雪の日はさむくこそあれ甘きは甘きに極りたれば、今日より御坊の詞をそむかじ、さもあれ、むかし腰折を好み、三十一文字をも知る、御坊笑ひ給ふなとて、矢立を乞うて扇に記す、手拙からず見えて「露と見る浮世を旅のまゝならば何處も草の枕ならまし」翁難じて曰く、我伊城に仕へしとき、洛の季吟の歌枕をたゝき、敷島の道にいざなはれし、今は俳諧の短きに遊んで生涯の計とす。汝に路通の名を與へん、我頭陀をかゝす事なし、日も暮れぬ、しりへに來れと、夫より師弟のあはれみ深く、暫く蕉門の人なりし○按ずるに頭陀物語まことならんには、此句貞享五年の句なるべし、諸集を見るに、路通が名は元祿二年三月の撰集曠野にはじめて路通が句「我儘をいはする花のあるじ哉」の吟見えたり。又奥の細道、是も元祿二年の紀行なり、其末に路通も此湊まで出むかひて、美濃の國へと伴ふと見えたり。しかれば貞享五年は則ち元祿元年なり。之に依て貞享五年笈の小文の行脚の年にや、とす。又韵塞に有る所の李由入門元祿四年の冬ならんには、其翌五年の句とせんには、凉袋が云ふ所、路通入門貞享五年の句にはあらじ、未だたしかなる所を知らず。

此湊とは越の敦賀の湊なり、此時路通「一泊りみかはる萩の枕哉」の句ありて、芭蕉も一巡の歌仙あり、其集を萩の枕と云ふ

晝顏に米舂涼むあはれなり

貞享五年彌生の撰の續の原にあり○貞享四年の眞蹟杉風家藏に、夕顏に、と有り、前書なし○類柑子に祖師の自讃と有り○六祖法寶檀經曰、祖曰、這獦獠根性大利汝勿言、著槽廠去、慧能

武藏曲集は千春撰

退至後院、有一行者、差懸能破柴蹈碓、經八月餘。と有り。

夕顔の白く夜の後架に紙燭とりて

天和二年の武藏曲に見えたり○泊船集に天和の頃の句なりと有り。

夕顔や秋はいろ〳〵のふくべかな

元祿二年の曠野集夏の部に見えたり○泊船集秋の部に有り○伊達衣に、是又秋の部に出でたり○むつちどり古今抄等にも秋の部に出でたり、ふくべ哉と假名なり○古今抄に曰く、瓢の見様體なり、さるを夕顔や秋はと云へるは夕顔の花と瓢の實との夏秋の差別にて、句情は瓢のをかしみより、やさしき花の夕顔も斯るふくべになりぬるやと、此やは疑のやと知るべし。本より連俳の證句にも口合のやに哉と留むる事は、押字抱字の論なけれど、疑のやには此法を知るべし。詮用は、秋はと句を切りて、下に心をことわる故なり。下略○宇陀法師に、や文字の習ひの事、連歌「しぐれきや雲に露けき山路哉」此や文字はけりと云ふに通ふ故、哉と留むるなり。旁大秘事なり。「夕顔や秋はいろ〳〵のふくべ哉」此や文字疑ひにて、哉と留むるなり。瓢は惣名にして、百なり、千なり、長ふくべ品々あれど、花は一色、夕顔といへるは如何なる事やと云ふ事なり。名人のてには心の及ぶ所にあらず○評林に云、句選には秋の部に入れず、夏の部に入れたり。夕顔と云へるより也。泊船集には秋の部に入れたり。全く秋の句也。夕顔やとして秋はいろ〳〵と定めたれば、ふくべの句なり。古今物の名の歌に「緑なる二葉草とて春は見し秋はいろ〳〵の花にぞありける」○句解に曰く「緑なるひとつ草とぞ春は見し秋はいろ〳〵の花にぞ有りける」此詠歌の心に通へり。や哉の句法口受○發句集に秋の部に入れたり○目圖

に、古今第四秋の部讀み人しらず「綠なるひとつ草とぞ春は見し秋は色々の花にぞありける」此歌を取れり。此句夕顏の題なり。やとして哉と留むる事は傳なり。聞くべし○按ずるに、評林句解共に古今抄、宇陀法師、目圖の說によれりと見えたり。此句秋とする事古今抄を始として、やの字を疑とし、哉を治定とせるより、瓢の見樣體と取る。こゝに疑ひなきにしもあらざるは芭蕉の序ある所の荷兮が撰元祿二年の曠野集に慥に夏の部に出せり。是を夏と見る時は、夕顏やのや文字物をして呼出せる詞とも見、哉は少疑とも見る時は、今こそ夕顏の花よ、秋はいろ〳〵の瓢になる物なり、極めて嘸なるらんと、治定の內にうたがひ有り、疑のうちに治定あり、是支考が云ふ所の哉は咏嘆の餘韵と云へるもあれば、曠野に夏とせるを僻事とも定め難きか。まして其序は則ち芭蕉の文にして、現在に出板ありたる集と云ひ、支考許六が秋と云へるにもあらねど、瓢の句と見る

翁草は元祿九年里圃選　沾圃序

發句集貞享五年とす

發句集貞享五年とす

時は秋たらん。されどあら野に夏の部に出せるを誤りと云へる事も見えず。支考、許六、風國が秋とせるを曠野の印板に對してよしとも定め難し○翁草にも夏の部にあり○衛掛集に木曾の人の句ありて其句に並べて前書、初秋中此所に遊んで、とありて此句見えたり。

夕顏や醉うて顏出す窓の穴

元祿七年の續猿蓑に芭蕉庵卽興と前書有りて「晝顏や日は曇れども花ざかり　沾圃」とある句の次に、此夕顏の句見えたり○泊船集にも見えたり。

岐阜にて

おもしろうてやがて悲しき鵜舟哉

貞享五年の吟なるべし。笈日記岐阜の部に名にしあへる鵜飼

一條禪閤關の藤川紀行
に鮎の鮓燒と云ふもの
なきこしめして
ながら川鵜のはく鮎の
鮓やきめづらにも見つ
あはれにも見つ

菊の香集、風國撰、

初蟬も同人撰也

初蟬集にも此事ありと
見えたり、未だ此集は
見ず

と云ふものを見侍らんとて、暮かけていざなひ申されしに人々稻葉山の木陰に席を設け、盃をあげて「又やたぐひ長良の川の鮎膾」夏來ても只一つ葉の一葉哉」鵜舟も通り過ぐる程に歸るとて「面白てやがて悲しき鵜舟哉」と見えたり。按ずるに、夏來てもたゞ一葉の句、貞享五年の笈の小文に見えたり。是れ同時の吟と見る時は貞享五年ならんか○菊の花集に云、此句晋子が所持の翁の自筆には「面白うてやがてなかゝる鵜舟哉」と侍りぬるよし晋子より申越しぬと見えたり○自得發明辨に、初蟬集を難じて曰く、此五文字にて文字あり、則校考に見えたり其上晋子が方より申越し侍るなど申て書き侍るならば、委しく曠野を見せたし、此句曠野に出でゝ一天下三歲の童子まで覺えたる句也○曠野集に岐阜にて「おもしろうさらしさはくる鵜繩哉　貞室」同じ所にて「おもしろうてやがてかなしき鵜船哉芭蕉」と有り○評林に云、此句は洛の貞室が發句に「おもしろうさらしさはくる鵜繩哉」是によるなるべし○按ずるに曠野に貞室が句と並びてあるを以て、評林かく心附きたるなるべし、よれるや知らず○師走袋に鵜飼の諸の詞に、隙なく魚をとる時は罪も報いも後の世もわすれ果てゝ面白や、といへると。又は、鵜舟に燈す篝火の消えて闇こそ悲しけれ、と云ふ二所の詞をとり、一句を仕立てたる、面白うてやがて悲しきの句のつり合ひなり。

名にしあへる鵜飼と云ふも
のを見侍らんと暮かけてい
ざなひ申されしに人々稻葉
山の木陰に席を設けて盃を
あげて
またたぐひ長良の川の鮎なます

貞享五年の句也。己が光集に前書、美濃國にて辰の年、とあり○按ずるに辰の年は則ち貞享五年にて、元祿改元の年なり○笈日記には、またやたぐひ、とやの字あり○己が光には、またたぐひ、とあり、笈日記のおもては前章の鵜舟の句に述べ侍ればここに述べず○師走袋に、此句世に類ひなしと云へるを、ながらと云ひかけたる句なり、句の意下に餘る句法なり。

なまくさし小なきか上の鮠の腸

元祿七年の句にや。笈日記元祿八年の詞に、去年の夏、阿叟の桃花坊におはす時、人々寄り居て物語りし侍るに、支考が集作らば何がしの桐火桶に似せて侍らん、たとへば「梅が香にのつと日の出る山路哉」「なまくさし小なきか上の鮠の腸　翁」むめが香の朝日は餘寒なるべし、小なぎの鮠のわたは殘暑なるべし、是を一體の趣意と注し侯はんと申したれば、阿叟もいとよしとは申されしと見えたり○按ずるに、こなき、増山井に八月の季に有り、まして支考が殘暑と云へれば猶更句選に夏の部に出せるは誤りなるべし○小なきの事、夏季に水葵と云ふものあり、是をこなきと覺えたるやからもあるか。ワクカセワに夏の部に、水葵本名蓴、又鳧葵とも水鏡とも云ふ、葉は蔦に似て、夏黄花を開く、又白花のものあり。水中に生ひ立ちて潔く、人家近き家には生ぜず、依て見知る人稀なり。コナキを水葵と覺えたる輩まゝあり、浮薔は秋なり、碧花なり、混ずべからず。同書秋の部に浮薔コナキと訓ず、一名澤桔梗、葉は葵の形にして、滑なる所、那岐に似たり。夏の末より秋碧花開く、花コナキと云ふなり、水艸なり、是を水葵と覺えたる輩多し。水葵は蓴なり、花黄なり○説叢に小なき、水葱に大小の異種あり、今俗の水葵とて田の中或は用水堀の中、田間の滯又は澤池などに生ずる水草なり、夏五六月、淡紫の花咲きて、葉は葵の如くすべらかに光あり、和

増山之井、八月コナキ澤桔梗と見えたり
大和本草、荇關雎の詩に詠ぜる荇菜是なり、又莕と云ふ、其葉馬蹄に似たり、又よく睡蓮に似たり、葉の形蓴菜の如くにして其端分るること睡蓮の如し、蓴菜の葉の切あるに異なり、葉水面に浮ぶ、ひとへの黄花を開き、莖根長し、花も水面に浮ぶ江州唐崎の水中に多し荇菜をアサヽと訓ずるは謬なるべし、アサヽはカハホネに似たる水草なり、

名抄に水葱、蕿水菜、可食、和名奈木、又延喜式、萬葉にも見えたり、大和本草にも見ゆ、千梅がワクカセワの説は誤りなり。予壯年より魚釣を好み、今に四十年、東西の蕩西は殘る所なく歩行せしに、小なきの七八月頃まで咲きし事を見る、其道のはたに村童などの釣り捨てし鯍の踏み碎かれて腐の出でたる、殊に腥かりし。誠に殘暑の時候少しも違はず○按ずるに、大和本草に浮薔、三才圖繪草木第十卷に載せたり。其圖に書ける花葉桔梗なり、水澤に生ず、葉厚くして慈姑に似たり、夏秋紫碧花を開く、堪久可愛。和俗水葵とも澤桔梗ともいふ、花の色桔梗に似たり。

松魚うりいかなる人を醉すらん

元祿三年のいつを昔集に見えたり○類柑子にも有り○泊船集にも出でたり。

漣々云、白兎園藏芭蕉眞蹟短冊に、鎌倉は、と有り、はの方ならん

鎌倉を生て出けんはつ松魚

元祿五年の蕩の松原に、鎌倉の初松魚は、支考が東行より歸る時、かゝる事有りとて見せ申されしを、生きて出ると云ふに、かまくらの五文字又其外有るべくも承はらずと申したれば、うれしく聞き侍るとて、阿叟もにくみ申されしが、自も微幸にいひ明しぬらん、つら〱おもへば生死のさかひを以て出入せんに、鎌倉六波羅の外殊に有るべからず、しばらく風雅に遊ぶ人も生きてかまくらを出でし松魚の、今は、武江の游鹽となり果つるよと、世の觀想にのみ眼を留むる事、此句ばかりにも限るまじ○類柑子に、かまくらは、と有り○眞蹟集に又、鎌倉はとあり○むつ千鳥は蕩の松原と同じく、をとあり○泊船集是に同じ。

發句集元祿四年とす

水無月や鯛はあれども鹽鯨

元祿五年の菊の松原に、水無月の鹽鯨と云ふものは、淸少納言も得知らざりけん、いとめづらし、風雅の動かざる所は、みづから知り自ら悟る道ならんかし○夫木抄に知家「六月や君がなさけにあひそめてうくてふ鯛は今も有りけり」

蓮の香に目をかよはすや面の鼻

元祿三四年の間の句なる可し。笈日記湖南の部に、其頃の句に並びて本間氏主馬が亭に招かれしに、太夫が家名を稱して、吟章二句「ひら〳〵と上る扇や雲の峯」「蓮の香に目をかよはすや面の鼻」と見えたり○泊船集に、大津丹野亭、と前書有りて、此二句有りて、次に丹野は能太夫なれば斯くは申されしなり○續猿蓑に「稻妻や顏の所が薄の穗」と芭蕉の申されしも、此本間が亭にての句なり○翁草に、丹野が仕舞の敎談に、と前書ありて「蓮の香や目より潜りて面の鼻」とあり。

菅菰抄に伊藤玄順、淵庵は號、不玉は俳名なり

あつき日を海に入れたり最上川

元祿二年の吟なり。奥の細道に、羽黒を立ちて鶴が岡の城下長山氏重行と云ふもの丶ふの家にむかへられて、俳諧一卷あり、左吉も共に送りぬ、川舟に乘りて酒田の湊に下る、淵庵不玉と云ふ醫師の許を宿とす「あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ」「暑き日を海に入れたり最上川」と見えたり○泊船集に「すゞしさや海に入たる最上川」とあり○菅菰抄に此句上五文字、すゞしさを、とも聞ゆ、後に、あつき日、と改りしなるべし。此句は酒田寺島彥助亭にて興行歌仙の發句也、按ずるに此句の上五文字、凉しさを、にて、海へ入たり、としては惜む體にて、挨拶の吟には快からず、故に推敲の後、暑き日を、と改め申されたるなるべし○師

菅菰抄に山形を水上とするは須賀川にて別の川なり、按ずるに此所の穿鑿に及ばず、たゞ文と句とを見るべきか

走袋に、出羽の最上の句也、最上邊は海なき所也、されども日の入ては涼しく成て、暑き事はいさゝかもなければ、是は日の海中にや入りしとなり、所になき海を出せし作なり〇按ずるに奥の細道に、最上川は陸奥より出て山形を水上とす、碁點、隼など云ふおそろしき難所あり、板敷山の北を流れて、果は酒田の海に入る、とあり。山形は東、酒田は西なり〇雪丸けに、六月十五日寺島彦助にて、と前書有りて「すゞしさや海に入たる最上川」と有りて「月もゆりなす浪のうき海松　令道」「黒鴨の飛びゆく庵の窓明けて　不玉」其外定連、曾良、任曉、扇風七吟七句あり。

發句集に元祿二年とす

湯をむすぶちかひも同じ石清水

何れの年の吟にや未だ知らず。陸奥衛に、那須温泉、と前書あり。又同集に云、那須温泉羽黒より六里餘、湯壺五つ兩町の間にあり、權現八幡一社に籠る、旋に聖觀音と見えたり〇按ずるに芭蕉此所遊杖の事、奥の細道に見えたり。しかれば元祿二年の吟にや。されど其紀行に此句見えず、よつて年を知らずとす〇泊船集にむつちどりの如く前書あり〇神社考に曰、山城國男山山下有流、號石清水〇又同書に開成祈水、一日夜夢一人自北方飛來形如夜叉、曰八幡太神令我取天竺白鷺池水來充師之經滴也、成問、誰乎、答曰信州諏訪南宮也、寤見之淸水盈閼伽器、成得金水乃棲桂窟寫般若經〇雪丸けに温泉大明神の拜殿には八幡宮を遷し奉りて兩神一方に拜まれ給ふ、と有りて、此句見えたり。

開成は光仁帝の子、桓武帝の兄なり、天平神護元年正月朔日潜かに宮を出で勝尾山に入り剃髮す

發句集貞享五年とす

岐阜山

城あとや古井の淸水先問ん

何れの年にや、笈日記中瓜畠集に有りて、前書、岐阜山にて、と有り〇泊船集にも前書かく見えたり〇按ずるに、此集瓜畑と名

秀信卿は織田信長公の二男、童名三法師丸

付くる事「山陰や身を養はん瓜畠」と芭蕉の吟あればなり。此山陰やの句、元祿三年の俳番匠に見えたり。然れば彼地遊杖の句なるや。又此岐阜の城は慶長五年中納言秀信卿居城落城して秀信卿は高野山に入る○西行物語に、心にまかせぬ命なりければ、都に歸り來りて見れば、其古へ馴れし住家も異樣になりて、いづくを宿と定め、誰を友と睦ぶべしともおほえで、あゆみ行くに、主なくなりたりし泉をつたへてゐたりし人のもとにまかりて、いづみにむかひてふるきを懷ふと云ふ事を詠み侍りしに「すむ人の心くまるるいづみかな昔をいかに思ひ出づらん」

清瀧の水汲よせてところてん

何れの年にやいまだ定かならず。笈日記に嵯峨五句と有りて「時鳥大竹原を漏る月夜」落柿舍と前書ありて「五月雨や色紙まくれし壁の跡」野明亭と前書ありて「清瀧の水汲よせてところてん」「小倉の山院と前書ありて「松杉をほめてや風の薰る音」嵐山と前書ありて「六月や峯に雲おく嵐山」と五句見えたり。此內五月雨の色紙の句、元祿四年の雜談集に出でたれば、此清瀧も其頃の句にや○泊船集「清瀧や波にちり込青松葉」波に塵なしと云ふを斯樣になしけるは翁の遺言なり。「清瀧の水汲せてや心太」とありしは、野明に引裂きすてさせ給ふ。笈日記に水汲よてと云ふは誤りなるべしとあり○按ずるに芭蕉の引裂き捨てさせたるは「大井川浪に塵なし夏の月」の句にして白菊の目に立て見る塵もなし」の句に紛はしとての事なり。其事笈日記難波の部に見えたり。又去來抄にもあり。しかれば泊船集誤りなるべし。清きをほめて塵なき事を云へる所、清瀧白菊にこそ紛はしけれ、波にちりこむ青松葉に水汲よせて心太の紛はしき事侍らざるか○目圖に「清瀧や波にちり込む青松葉」西行「降

元祿三年の秋津島集に
あら凉し水に塵なき秋の月　一晶

貞享四年の雜談集に見
去來に供して伊勢へ詣でける道すがら初旅の心を
伊勢迄のよき道づれや初の雁　女千子
芝草の露もちかぬるそだち哉　同
素堂の蝸の句は天和二年武藏曲に有り、似鳩苑書に千子辭世
もえやすく又きえやすき螢かな

りつみし高根の深雪とけにけり淸瀧川の水の白浪」此歌の勢ひをかりての句なりと見えたり。

なき人の小袖も今や土用干

元祿四年の猿蓑に千子が身まかりけるを聞きて美濃の國より去來が許へ申遣し侍りける、と前書有り○去來抄に「行すして五湖烹蝸の音を聞く　素堂」なき人の小袖も今や土用干　芭蕉」素堂の句は深川芭蕉庵に送りたまふ句也。先師の句は予が妹千子が身まかりけるころ、美濃の國より送りたまふ句なり。共に其事をいとなむ只中にまゐれり。此頃古藏書を見るに先師の事ども書きちらしたるかた端に素堂子の句をあげて烹蝸の只中に來る事を以て名人達人と名譽をかゝれたり。是を以て名人といはゞそしらるゝ。先師の句もかくの如し、皆人の知る事なり、夫のみならず世話にも人こといはゞむしろしけといへり、一氣の感通自然の妙應、かゝる事も有るものと知るべし。誠に癡人面前に夢を説くべからず○按ずるに曠野に去來が句あり、前書に妹の追善にとありて「手の上にかなしく消ゆるほたる哉」とあり。此集元祿二年彌生と芭蕉の序あり、しかれば去來が妹身罷りたるは元祿元年にや、此二年の夏は芭蕉奥州行脚にて美濃に在らず、夏美濃の國に在りたるは貞享五年にして則ち元祿元年なり、かく考ふる時は、このなき人の句、元祿元年にや。又元祿四年の猿蓑にあれば、千子が三回忌元祿三年の句にや。尤も此頃も上方遊杖のことあればさもあらん、されども千子が身まかりけるを聞きてとある前書を思へば三回忌とは聞えず、やはり元祿元年の句なりと思はれ侍る。いづれに元祿中の句なるべし。

晋淵明をうらやむ

發句集元祿五年とす

新々式は許六撰

窓なりに晝寢の臺や簟

元祿七年の續猿蓑に前書ともにたがはず見えたり○古文眞寶に陶淵明歸去來辭曰、倚南窓以寄傲、審容膝之易安、園日涉以成趣、門雖設而常關、策扶老以流憩、時矯首而游觀、雲無心以出岫、鳥倦飛而知還、下略○新々式夏の部に、簟是はもろこしに有る事なり、水波藻等の模様を織りたるむしろなり「窓形に晝寢の床やたかむしろ」晝寢を夏季と覺えたるやからも有り、晝寢に季のあるべきやうなし○晉書陶潛傳潛嘗言、夏月虛閑、高臥北窓之下、淸風颯至、自謂羲皇上人○赤草紙に「窓形に晝寢のござや簟」と有り。此句、淵明をうらやむ、と前書有り、はじめは晝寢の臺や、と中七文字あり。

野明亭

發句集に元祿七年とす

すゞしさを繪にうつしけり嵯峨の竹

何れの年にや未だ知らず。泊船集に有り○師走袋に、此句すゞしき體をいひ立てゝ、たとへば嵯峨の竹を繪に寫すが如しとなり。嵯峨は竹多き所にて、其所もいさぎよき所也。繪にうつしたるが如しと云へる所一作なり○按ずるに元祿四年嵯峨日記に「竹の子や稚き時の繪のすさみ」との吟有りければ、自ら幼き時を思ひ出で、是は現在の畫圖なるか。師走袋の說おぼつかなし。

すゞしさやほの三日月の羽黑山

元祿二年の吟にして、奥の細道に、六月三日羽黑山に登る、圖司左吉といふ者を尋ねて別當代會覺阿闍梨に謁す、南谷の別院に舍して、憐愍の情濃やかにあるじせらるとありて、末の方に

清風は貞享三年の一ツ橋集に京大阪を遊杖して、信徳、才丸、如泉などを友とし、俳諧せし事見えたり

阿闍梨の需によつて三山巡禮の句短册に書く、と見えて、此句見えたり。

涼しさを我宿にしてねまるなり

元祿二年の吟なり。奥の細道に尾花澤にて清風と云ふものを尋ぬ、彼は富める者なれども志いやしからず、都にも折々通ひてさすがに旅の情をも知りたれば、日頃とゞめて長途のいたはりさま〴〵もてなし侍る、と有りて、此句見えたり○類柑子に故翁の奥の細道見侍るに、とありて此句あり、其評に曰く、擧白集にはじめて吾妻にいきける道の記、五日、小田原と云ふ所の宿に泊る、明くれば玉だれの小瓶に酒少し入れて、粽めくもの御前にとてさしいづ、あるじの男にやあらん、けふは目出度せちに候、一盃けしめされ候へかしと、あいたちなく云ふも、顔まほられぬべし、しどけなきことうち語りて今しばしねまり申べいをそれがしが旦那のえらまからんとて立ちぬる彼が振舞につけて(下略)道の記の一體民語漸くかはるなど云へるにつけて、とみに東國のだみたる詞を一句にして、風流を發されしこそよき力ぐさなるべけれ、と有り○菅菰抄に云、清風は其頃名高き富家にて、俳諧は翁を師とす、凡て富人は必ず欲と吝とに居て志賤しく風雅の情疎きものなり。此文は世上の富める者を矯め戒むるの詞ならんか、心をつけて見るべし○按ずるに矯め戒むるの詞にや、只彼が風流を稱したるなるべきか、人を矯め、世を憤るなど芭蕉の意にあらず○又菅菰抄に按ずるにねまると云ふ詞二義あり、北國のねまるは他國にて居（すわ）ると云ふ詞に當るべし。又關東にて卑俗の詞に綖はらばふ事をうちねまると云ふ、此句意を考ふるに、翁北國の詞を聞きたまふは此行脚の時はじめなる故に、羽州のねまるを關東のねまると同樣に思ひあやまり給ふにや○按ずるに、菅菰抄の作

削かけ集は支考選

者梨一は越前の國の者なり、さるによつて羽黒の詞不案内にて、かく翁のあやまりにやと疑ふなるべし、其身知らぬ事を以て其地に正しく遊杖して吟じたる詞を難せしはいかにぞや、此詞の事、彼の國出生の人に尋ね侍るに、寢る事をねまると云ふ、尾花澤に尾花塚と云ふ有り、是は「糸游蛇にまかれてねまりけり」と云ふ發句塚なり。是は其地の土民游が蛇にまかれてねまり申したと語りけるを、芭蕉すぐさま發句に綴りける由、是やはり游のねたる事をねまると申せしなり。

野水新宅

涼しさを飛騨のたくみが差圖かな

元祿七年の夏江戸より歸りたまふとて、野水新宅に立寄り、飛騨の工が發句ありと削かけに見えたり○つれづれ草に、家のつくりやうは、夏をむねとすべし、冬はいかなる所にも住まる、暑き頃わるき住居は堪へがたきものなり○皋白集に、之俊が家造り改めて會せし時、庭前の梅を「その花や是にもさける飛騨たくみうつ墨縄の宿の梅が枝」。

發句集元祿七年とす

閑居を思ひ立ける人の許に行きて、

涼しさは差圖に見ゆる住居かな

何れの年にやたしかならず。笈日記尾張の部に、去年元祿七年の前の五月なるべし、尾張の國に入りて舊交の人々に對す「世を旅にしろかく小田の行もどり」閑居をおもひ立ちける人の許に行きて「すゞしさはさし圖に見ゆる住居哉」と見えたり○發句集に、前書、野水閑居を思ひ立ちけるに、と有り、頭書に、忘水に、はじめは、飛騨の內匠が差圖かな、と有りしと見えたり。

發句集元祿七年とす

涼しさや直に野松の枝の形

元祿七年の吟にや。笈日記伊賀の部に、雪芝亭と前書有り○按ずるに、其文の中に、去年元祿七年後の五月雨に武江より舊里に渡りて、洛の東花坊に遊び、湖の木曾塚に納涼して、文月の始め再び伊賀に歸りて、親しき人々の魂など祭りて、九月の始、又難波津の方に旅立つと見えたり。しかれば始め舊郷に渡りし時の吟にや。貞享五年四月尾張を立ちて、其四月武江に歸庵翌元祿二年夏は奥羽行、同三年夏は石山幻住庵、同四年夏は嵯峨日記也○發句集に、雪芝が庭に松を植るを見て、と前書あり○此句泊船集にも出でたり○山家集に「野にたてる枝なき木にも劣りけり後の世知らぬ人の心は」。

此あたり目に見ゆるもの皆涼し

發句集貞享五年とす、賀島氏落梢、

風俗文選には雨は左右とあり

曝布と風俗文選に眞名に假名つけあり、按ずるに、瀑布にて、瀧の事にはあらざるか

風俗文選には、いはまほしき也

貞享五年六月の吟なり。笈日記岐阜の部に、十八樓の記あり。其文に曰く、美濃の國長良川に臨みて水樓あり、あるじを賀島氏と云ふ、稻葉山後に高く、亂山雨に重りて、近からず遠からず、田中の寺は杉の一むらに隱れて、岸にそふ民家は竹のかこみ緑も深し、さらし布所々に引きはへて、右に渡し舟浮ぶ、里人の行きかひしげく漁村軒を並べて網をひき釣をたるゝおのがさま〴〵も、ただ此樓をもてなすに似たり。暮れがたき夏の日も忘るゝばかり、入日の影も月にかはりて、波にむすぼるゝ篝火のかげもやゝ近く、高欄のもとに鵜飼するなど、誠にめざましき見物なりけらし、かの瀟湘の八の眺め、西湖の十のさかひも涼風一味のうちに思ひためたり。若し此樓に名をいはんならば十八樓ともいはまほしや「此あたり目に見ゆるものは皆涼し」貞享五年仲夏芭蕉と見えたり○風俗文選に、目に見ゆる物皆涼し、とありて、はの字なし。

汐こしや鶴脛ぬれて海涼し

元祿二年の吟にして、奥の細道にあり。其文に曰く、江山水陸の風光數を盡して、今象潟に方寸を責む、酒田の湊より東北の方、山を越え磯を傳ひいさごをふみて、其際十里、日影やゝかたぶく頃、汐風眞砂を吹き上げ、雨朦朧として鳥海の山かくる。闇中に莫作して雨も又奇なりとせば、雨後の晴色又賴母敷と、蜑の笘屋に膝を入れて、雨の晴を待つ。其朝天能く霽れて朝日花やかにさし出づる程に、象潟に舟をうかぶ。先づ能因島に舟をよせて三年幽居の跡をとぶらひ、向ふの岸に舟をあがれば、花の上漕ぐと詠まれし櫻の老木、西行法師の紀念をのこす。江上に御陵あり、神功后宮の御墓と云ふ干滿珠寺と云ふ。此處に行幸ありし事未だ聞かず、いかなる事にや。此寺の方丈に座して簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさゝへ、其陰うつりて江にあり。西はむやむやの關路をかぎり東に堤を築きて秋田に通ふ道遙かに、海北にかまへて浪打ち入る所を汐こしと云ふ。江の縱横一里ばかり、俤松島にかよひて又異なり。松島は笑ふが如く、象潟はうらむるが如し、寂しさに悲みを加へて地勢魂を惱ますに似たり「象潟や雨に西施がねぶの花「汐越や鶴はぎぬれて海涼し」と有り○宇陀法師に腰長やと有り○奥羽行に、汐越の里なる金氏何某の家に持ち傳へし祖翁の自から書かせ給ふ高詠を敬拜して寫す「象潟の雨や西施がねぶの花「夕方雨やみて所の何がし舟にて江の中を案内せらる、「夕晴や櫻にしづむ波の花、腰長の汐越と云ふ所はいと淺くて鶴下り立ちてあさるを、腰長や鶴脛ぬれて海涼し、武陵芭蕉翁桃青とありて、次に以哉坊が詞書に云、三章ともに唐紙の横物一幅に書き殘し給ふ筆のあと鮮かにして、誠にいますが如しともいはんか、さるを奥の細道には、象潟や雨と、腰長の五文字汐越

管絃抄に云

莫作は摹索の誤なる可し、世説新語補に暗中に摹索して亦た識る可しとあり、卑俗のクラガリニテサグッテ見ても知れると云ふことなり此にては唯だ闇中に坐して、そこらあたりの知れかぬる形容と見る可し、雨も又奇なりとせば雨後の晴色又たのもしとは東坡西湖の詩に、水光瀲灔晴偏好、山色空濛雨又奇、欲下把二西湖一比中西子上、淡粧濃抹又相宜、

後拾遺　能因

世の中はかくても經けり象潟の蜑の笘屋を我が宿にして、

能因奥州下向の事袋草紙に記有り

西行

象潟の櫻は波にうづもれて花の上こぐ海士の釣船

と有りて、中の一章は全體漏れ侍りぬ。此度の行脚に眞跡を拜することと、常に信仰の本懐淺からねば、猶はた此地に漂泊の好士の乞うて拜せんがために爰に記すものならし○類柑子に汐こしやとあり○泊船集には、腰長や、とあり○皆嶽抄に此句翁の自筆今汐越町庄屋の所に殘りて五文字、腰長や、とあり、しほこし川の中に腰たけと云ふ淺瀬あり、そこに鶴の下り居たるを見申されての即興と云ひ傳ふ○莊子外篇に、駢拇第八、彼正正者不失其性命之情、故合者不爲駢、而枝者不爲跂、長者不爲有餘、短者不爲不足、是故鳧脛雖短、續之則憂、鶴脛雖長、斷之則悲、故性長非所斷、性短非所續、無所去憂也、意仁義其非人情乎、彼仁義人何其多憂也○按ずるに延寶九年の次韵に「鷺の足雉脛長くつぎそへて　芭蕉」此句以莊子可見矣　其角」と脇あり、此所に芭蕉遊べりと見ゆ。

西行櫻

夕晴やさくらにすゝむ波の花

元祿二年の奥羽行脚の時の吟と云ふ事前章に見えたり○句解に曰、西行櫻は象潟干滿珠寺の入江に覗きてと有り。山家集に「象潟の櫻は波に埋もれて花の上漕ぐあまのつりふね」○評林に云、此波の花は月を賞したるなる可し○說叢に曰、予常に素龍が記せし古板の奥の細道を考ふるに、象潟の文段に云、向の岸に舟をあがれば、花の上こぐとよまれし櫻の老木、西行法師の紀念を殘す、江上に御陵有り云云とありて、此句なし。俳諧むつ千鳥に象潟の部に入たり、其外の集も又其通りなり。然るに我が門弟安房の國なる幽興僧古郷新潟へ赴きける時、越後にて翁の眞跡見しとて送れるを見れば、花の上こぐとよみ給ひけん古き櫻もいまだ蚶滿寺のしりへに殘りて、陰波をひた

杜律に醜使ニ堤柳ニ繫、幅帶ニ浪花ニ浮

せる夕晴いと涼しかりければ、といふ詞書ありて此句あり。右は越後の國新潟のうち沼垂町（ノツタリトヨム）眞野仁藏家珍とせるよし也。句意は明か也。此古木の夏陰に休らひて、夕晴の波の花を櫻に見なしたる風情いはんかたなし、波の花は月なりとはいぶかし○按ずるに、御傘に曰、波の花水邊に可嫌之、植物に不可嫌と、新式も斯の如し。波の花、雪の花は正花にならず、但し波に落花の有る句體ならば春也。又蓼太が花箇箇に、花の波と波を花に見立てたらば元來波なれば似せものゝ花にして正花に非ず植物にも非ず、又波に花の浮びたるなどは格別なり、御傘にも水邊に三句去とあることはかやうの類なる可し、しかれば評林の說むづかし○雪丸に、六月十七日朝、象潟雨降り、夕止む、舟にて潟を廻る「象潟や雨に西施がねふの花　芭蕉」次に曾良、低耳、不玉などが句有りて此句見えたり。○泊船集に、花の上漕ぐとよみ給ひけん古き櫻もいまだ蚶滿寺の後へに殘りて、陰波を浸せる夕晴いとすゞしければ、と有りて此句見えたり。

丙寅紀行　風瀑述

延寶六年の江戸廣小路に佐夜の中山にて
命なりはつかの笠の下すゞみ　桃靑

忘れずば佐與の中山にてすゞめ

天和四年の吟也、古今抄に天和の頃の作なりとあり○泊船集に風瀑に餞別すと前書あり○丙寅紀行に、佐夜の山淋し、芭蕉翁一昨年予に餞して「わすれずば佐夜の中山にて涼め」それは水無月の頃、今日は若葉の彌生、柳の緑青し○按ずるに、丙寅は則ち貞享三年なり、其詞にをとゝしといへれば天和四年にして、貞享改元の年なり○西行四季物語に、みちのくの方へ修行してまかりける時、さよの中山を過ぐとて、又越えんことも命不定におぼえてたのみがたかりしに、年經て後おもひの外餞にかへり侍りし事、命ありければと、又さやの中山にて思ひ出でられてあはれに覺えければ「としたけて又越ゆべしと思ひきや命なりけり佐夜の中山」

猿舞師集は元祿十一年雅文選、史子とあるは史邦が事なり

發句集貞享三年とす「破風口に日影やよはる」とす、考ふべし

川中の根木によころふすゞみ哉

元祿七年の炭俵に有り○泊船集にも出でたり○猿廻しに出羽と有りて右の句翁の句なりと誰やらが集に書入れたるは、翁と公羽の文を讀みたがへたると史子申されける。

唐破風の入日や薄き夕すゞみ

元祿五年の吟なるにや。三日月日記に納涼の折々言ひ捨てたる和漢月の前に滿たしむ、と前書ありて「破風口に日影やよわるゆふすゞみ　芭蕉、煮茶蠅避烟　素堂、合歡醒馬上」　同、勝第三有て、兩吟の和漢の歌仙有り。其序に支考曰、此三日月日記といふは、元祿の始めつ方、祖翁は武江の深川にいましまして、廬山遺集を學ばんとて入來る人々の詠草をあつむるに、素堂隱士の序辭有りて、先は三日月の風流より名月の夜の物好きにてえらびて三日月日記とは題せり(下略)○素堂の序、我友芭蕉の翁月に耽りていつはとは分かぬものから殊に秋をわたりて求なし、ある時は敦賀の津にありて水うみにさまよひ、其先の秋は石山の高根にしばし庵を結びて琵琶湖の月を詠じ、二とせ三年を隔てゝ此郷の秋に共に遊ぶなるべし(下畧)○按ずるに破風口といへる句吟聊かのたがひなれば、三日月日記にある所再案なるべし。扨是を五年と云ふ事は元祿元年の夏は美濃邊の行脚同二年の夏は奥羽行脚、三年四年は嵯峨や石山にありて、冬は江州平田の照明寺に「百年の景色を庭の落葉哉」と吟を殘して東武に歸る。されば五年の夏の吟なるべし○按ずるに去來抄に「此木戸や錠のさされて冬の月　其角」猿蓑の時此句を書き送れり。下を冬の月霜の月と置き煩ひ侍るよし聞ゆ。しかるに初は文字つまりて、柴の戸と讀みたり。先師曰、角が冬霜に煩ふ可き句にもあらずとて、冬の月に定め入集せり。其後

大津より先師の文に、柴の戸にあらず、此木戸なり、斯る秀逸は一句も大切なれば、たとへ出板に及ぶとも改むべしとなり。凡兆曰、此木戸、柴の戸、させる勝劣なし。去來曰、此月を柴の戸に寄せて見れば尋常のけしきなり、是を城門に移して見侍れば其風情哀れに物凄くいふばかりなし、角が冬霜に煩ひけるも理りなり、と。此意味思ひ合すべし○師走袋に、此句人の居宅を誉めて其家の涼しさは外の家とは違ひて、入日や薄きと疑へる體なり。唐破風とおける五文字にて、其家作の美々しき事思ひやるべし○發句集には貞享三年とす。猶追て考ふ可し○按するに此和漢貞享三年夏に仕掛て、其後蕉翁所々遊杖、元祿五年の夏歌仙滿尾ならん。

破風口に日影やよはる夕すゞみ

前の唐破風の句の再案ならん。

發句集に元祿四年とす

川風やうすかき着たる夕すゞみ

元祿五年の己が光に、四條河原すゞみとて、夕月夜の頃より有明過ぐる頃まで、川中に床をならべて夜すがら酒のみ物くひ遊ぶ、女は帶の結びめいかめしく、男は羽織長う着なして、法師老人ともに交はり、桶屋鍛冶屋の弟子こまでいとま得顔にうたひ罵るさすがに都のけしきなるべし、と文有りて、此句見えたり○泊船集に此文あり○さるかたの眞跡にも斯くの如く有り○師走袋に、四條河原涼みの句なり、川風のすゞしきを薄かき着たると疑ひの句なり、うすかきは何の色ともわかたずして、さらりとしたる物にかまはぬにたとへたり。

飯あふぐ嬶が馳走や夕すゞみ

元祿七年の吟にや。笈日記湖南の部に、曲翠亭に遊ぶとて田家

と云へる題を置きて「飯あふぐかゝが馳走や夕涼み」「夏の夜や崩れて明けし冷し物」是に今宵の賦を加へて後猿蓑に入集す。爰に記さず「菜種干すむしろの端や夕すゞみ　山翠」「蚤逃げゆくあぢさゐの花　翁」と見えたり。是など同時の吟ならんには、元祿七年の吟なるべしとす。

今宵の賦はひやし物の句の所にあらはして末に有り、此賦を見る時は此句も聞所あり

酒田の湊に下る淵庵不玉と云ふ醫師の許を宿とす

あつみ山吹浦かけて夕すゞみ

元祿二年の吟なり。「奥の細道」に前書斯の如くにて、句はあつみ山や、とや、の文字あり○韵塞に、あつみ山、とあり○宇陀法師おなじ○あつみ山集には、江上眺望と前書ありて、あつみ山やとあり。是に「海松刈る磯にたゝむ帆筵　不玉」「月出でば關屋をからん酒もちて　曾良」脇第三ありて三吟の歌仙見えたり○菅菰抄に、此句は袖の浦にての吟なる由、酒田の磯最上川の落口に袖形の洲崎あり、此所を袖の浦と云ふ。名所にて、古歌多し。あつみ山は袖の浦より十里ばかり南、出羽より越後へ出づる往還にあつみと云ふ驛あり。此東の山際に温泉の出づる所あり。是を湯あつみと云ふ。其上の山をあつみ山と稱す。此あつみは何れも溫海と書く、湯あつみより溫泉流れ出て、海水自ら溫氣有る故の名と云ふ。吹浦は袖の浦より六七里北にて、秋田海道の驛なり。袖の浦より見渡せば、南はあつみ山、北は吹浦の遊まで一目の内に落ち、前には海水洋々として絶景限りなし、且暑きに吹くとのとり合、旁句意を感ず可し○棚搜に、蓼太曰、此句の上のや文字省きて出せる集あり、如何にも、や文字無用のやと覺え侍りしに、先年象潟行脚の頃、福浦に一宿して此句を思ひ出せしに、あつみ山は遠く見えて、福浦は足下なり、やの字

不玉は羽州庄内城主酒井左衛門尉に仕へし醫師にて、伊藤玄順と云ひき

發句集元祿七年とす

鳥の道集は元祿十年奈良の玄梅選、

は、あつみ山や、ふく浦と首をめぐらしたる句なり。しかれば句の骨柄ばかりに除したるものにはあらず、面白み又格別なり、其地を知らざれば聞えぬ句も數多あるべし。

木節亭

秋近き心のよるや四疊半

元祿七年六月二十一日大津木節庵にて、と前書ありて、此句に「しどろにふせる撫子の宿　木節、月殘る夜ぶりの火影打消て惟然、」と脇第三、是に支考を加へて四吟の歌仙あり。鳥の道集に見えたり〇泊船集にも、大津木節亭、と前書あり。

行や我よき布着たり蟬衣

貞享四年の眞蹟杉風家藏に、前書に、門人杉風子夏の料とて帷子を調じ贈りけるとあり。句「いでや我よき衣着たりせみ衣」と有り〇評林に云、此句いかなる集にあるや覺束なし。されども句選に有り、此句は文屋康秀が歌の姿はよき衣着たる商人といへる詞にもとづくなるべし、蟬衣にて夏の日の凌ぎを思ひよせて、涼しき姿としられたり〇發句集に年號不知の部に、人に帷子を貰ひて、と前書あり。頭書に、諸集によき衣着たり蟬衣、とありと見えて、句は「いでや我よき布着たり蟬の聲」とあり〇按ずるに此句泊船集笈日記にもなし。

夏の夜や崩れて明し冷し物

元祿七年の續猿蓑に、支考が今宵の賦あり、此句にて附合あり、其賦に云、今宵六月十六日の空、水にかよひ、月は東方の亂山にかゝげて、衣裳に湖水の秋をふくむ、されば今宵のあそびはじめより尊卑の席をくばらねど、しば〳〵酌で亂らず、人そこそこに涼みふして野を思ひ山をおもふ、たま〳〵語りなせる人

さへ、更に人を興せしめむとにあらねば、强ちに辯のたくみをもとめず、唯泙の水にしたがひ水の魚を棲ましむるたとへにぞ侍りける、阿叟は深川の草庵に四年の春秋を重ねて今年はみな月さつきのあはひを渡りて、伊賀の山中に父母の古墳を弔ひ、洛の嵯峨山に旅寢して加茂祇園の凉みにもたゞよはず、斯くてや此山に秋を待たれけんと思ふに、さすが湖水の納凉も忘れがたくて、また三四里の暑さを凌いで、爰に草鞋の紐をとゞむ、今宵は菅沼氏をあるじとして、僧あり、俗あり、俗にして僧に似たる者あり、その交の淡きものは、砂川の岸に小松をひたせるが如し、深からねばすごからず、かつ味なうして人に倔かるゝなし、幾年なつかしかりし人々のさしむきて忘るゝに似たれど、おのづから喜べる色、人の顏に浮びて、おぼえず鷄啼て月も傾ぶきけるや、まして魂祭る頃は、阿叟も古鄕の方へと心ざし申されしを、支考は伊勢の方に住ところ求めて、時雨の頃は迎へんなども思ふなり、しからば湖（にほ）の水鳥のやがてはら〳〵に立ち別れて、いつか此あそびに同じからむと、去年の今宵は夢の如く、明年はいまだ來らず、今宵の興宴何ぞあからさまならん、そゞろに醉てねぶる者あらば罰盃の數に水をのませんとたはぶれあひぬとありて「夏の夜や崩れて明し冷し物

芭蕉、露ははらりと蓮の緣先　曲翠、鶯はいつその程に音を入れて　臥高」と脇第三ありて、惟然支考五吟の歌仙見えたり。

さくらより松の二木を三月越

元祿二年の吟にして、奥の細道に、武隈の松にこそ目覺むる心地はすれ、根は土際より二木に分れて、昔の姿失はずと知らる先づ能因法師を思ひ出、往昔陸奥の守にて下りし人、此木を伐つて名取川の橋杭にせられたる事などあればにや、松は此たび跡もなしとは詠みたり。代々あるは伐り、あるひは植ゑつぎ

古文眞寶に李白桃園序飛二羽觴一而醉レ月、不レ有二佳作一何伸二雅懷一、如詩不レ成罰依二金谷酒數一

後撰集　能因
たけくまの松はこのたびあともなし千年を經てや我は來ぬらん
後撰集は四條大納言公任の選

擧白は芭蕉門人草壁氏、虚栗に其名見えたり

などせしと聞くに、今將千歳のかたち整ひてめでたき松のけしきになん侍りし。武隈の松見せ申せ遲櫻と、擧白と云ふものゝ餞別したりければ、と前書有りて此句見えたり。松は、と有り○句解に曰、奥の細道を按ずるに、元祿二年彌生七日武江を立ちて、皐月初め武隈に至る、依て櫻より三月越と共日數を云うて夏季慥なるべし、たゞ長途の觀想紙毫に及ぶ可からず、歌に「武隈の松は二木を都人いかにと問はゞ見きと答へん」○菅菰抄に云、武隈の松は又鼻端の松とも云（奥州の詞に山の出崎をはなわと云ふ）此松は今岩沼の町中天神の社の傍にあり○記叢に曰く、句解當れり、引歌はちとあしかるべきにや、橘季通朝臣みちのくより上りて「武隈の松はふた木を都人いかにと問はゞ見きと答へん」かゝる歌を詠めると自讃しけるを、禪林寺大僧正深覺「武隈の松は二木をみきといはゞよくよめるにはあらぬなるべし」○按ずるに、二木みきとの句續に引たる、難あるまじきか○後撰集に、陸奥の守にまかり下れりけるに、武隈の松の枯れて侍りけるを見て、小松を植ゑつがせ侍りて、任果てゝ後又おなじ國にまかり下りて、彼の先の任にうゑし松を見侍りて、藤原の元能朝臣「うゑし時契りやしけん武隈の松を再びあひみつる哉」○奥義抄に曰、武隈の松は何れの代より有りけるものとも知らぬ人は植ゑし時と詠れたれば發束なくもや思ふとて書出で侍るなり、此松は昔よりあるにはあらず、宮內卿藤原元能といひける人の任の舘の前にはじめて植ゑたる松なり。みちのくにの舘は武隈といふ所に有り。此人再び彼の國の任になりて後の夏よめる歌也。武隈の松ははなはの松ともよめり。重之歌に「武隈のはなはにたてる松だにも我ごとひとりありとやは聞く、」武隈のはなはとて、山の差出でたる所のあるなりとぞ近く見たる人はまさしく此松野火に燒けにければ源滿仲が任に又植ゑ、其後失せたるを橘の道貞が任に植う。其後孝義伐りて

錢龍(シヤウ)賦は寶永二年嵐雪門人百里選

橋につくりて後絶えにけり。

夏ころもいまだ虱をとりつくさず

貞享二年の吟にして、野ざらし紀行に、卯月の末庵に歸り、旅の疲をはらすと有りて此句見えたり。此紀行元年の冬東都を出でて、翌二年深川に歸庵なり○甲子吟行にも見えたり○錢龍賦にも出でたり○小文庫には卯月の初め庵に歸りて旅の疲をはらす、と前書あり。

夏山に足駄を拜む首途哉

元祿二年の吟、奥の細道に、修驗光明寺といふあり、そこに招かれて行者堂を拜す、とありて此句見えたり○背蓑抄に曰、修驗とは俗にいふ山伏の事なり、羽州大沼山修驗戀窓の説に、理修德の文より出づと云へり。光明寺は武州幸手不動院の末寺なり。開基不詳、行者とは役行者の事にて、名を小角と云。元亨釋書に云、役行者公役氏(一茅原氏)今之高加茂者也、和州葛木郡茆原(チハラ)村人、少敏悟博學、兼郷佛乘、年三十二棄家入葛木山、後戲母於鉢、泛海入唐、と。世に傳ふ、小角常に木履を著けて嶮岨を行く事平地の如し、故に此像は必ず著履の形を作る。又世說に謝靈運履を著て山に登る事を藏す、是等のたち入れなるべし○按ずるに謝靈運が事をたち入發束なし。芭蕉の心を知らんずるに、其筆蹟によらで何にかよるべき。されば此奥の細道の發語に、日月は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なりと、李白が桃李園の序文を其儘に出して、扨次の文に、舟の上に生涯をうかべ、古人も多く旅に死せるあり、予も何れの年よりか片雲の風にさそはれて漂泊のおもひやます、と見えたり。此文の心、奥の細道末末まで皆備りたり。又仙臺にて畫工加右衛門が草鞋を餞別としたるを稱美して、こゝに到りては其實をあらはすと

光明寺は下野黑羽の領主大關伊與守家臣祿四百石津田光明寺云、武家修驗なり。今の光明寺は津田家より分れて一字となる、本家は祿百五拾石にて津田源太左衛門と云

笈の小文は貞享四年冬東武を出でゝ翌五年までの紀行なり

の文あり、又笈の小文には、山野海濱の美景に造化の功を見、あるは無依の道者の跡をしたひ、風情の人の言をうかゝふ。猶栖を去つて器物の願ひなし、空手なれば途中の愁もなし、寛歩駕にかへ、晩食肉よりも甘し、とまるべき道に限りなく、立つべき朝に時なし、たゞ一日の願二つのみ。今宵よき宿からん、草鞋の我が足によろしきを求めん、とばかりはいさゝか思ひ出づるなり、と見えたり。是より考ふるに、行者の履を拜むの心察すべきか。

有がたや雪をかほらす南谷

元祿二年六月四日の吟なり。奥の細道に、六月三日羽黒山に登る。圖司左吉と云ふ者を尋ねて別當代會覺阿闍梨に謁す。南谷の別院に舍して、憐愍の情こまやかにあるじせらる。四日本坊に於いて俳諧興行「有がたや雪をかほらす南谷」と見えたり○

花摘集は元祿三年其角撰

呂丸を露丸とも

古文前集　東坡
人皆苦炎熱、我愛夏日長、薫風自南來、殿閣生微凉、

此詞書は擧白集の選者の存正が訂なるべし

註曰以梅喩東坡、紅梅桃李所忌、東坡見嫉當世、獨人主知耳

花摘集に六月二十八日閑に他きて翁行脚の折節、羽黒山本坊に於いて興行の歌仙をひらく、元祿二年六月にやと詞書ありて「有がたや雪をめぐらす風の香　住むほど人のむすぶ夏草　露丸、川舟の綱に螢を引立て　曾良」と脇第三の歌仙有り○曾菰抄に此句始めの五文字風の香とあり、後に南谷と改る、薫風自南來といふ詩を得て取り合せ申されしなるべし○按ずるに花摘集に「雪をめぐらす風の音」と云へるは、月山の文に、岩に腰かけてしばしやすらふ程に三尺ばかりなる櫻の蕾半開けるあり、降り積む雪の下に埋もれて春を忘れぬ遲櫻の花の心わりなし、炎天の梅花こゝに薫るが如しとあり○擧白集に小鹽山に住給ひし頃、春日の社の花見にまうで給ひて散り過ぎ侍りければ「小鹽山神代のさくらおもしろく雪をめぐらす袖の春風」○古文前集贈東坡黃山谷詩に、江梅有佳實、託根桃李塢、桃李終不言、朝露借恩光、孤芳忌皎潔、氷雪空自香(下略)○雪丸に、

元祿二年六月四日羽黒山本坊に於いて興行あり「雪をかほらす風の音」とありて、脇も住みけん人のむすぶ夏草　露丸、川舟の綱に螢を引立て　曾良、と見えて歌仙あり。

語られぬ湯殿にぬるゝ袂哉

元祿二年の吟にして、奥の細道に、此山中の微細、行者の法式として他言する事を禁ず。依て筆を止めて記さず。坊に歸れば、阿闍梨の需に依て三山巡禮の句短冊に書く「涼しさやほの三日月の羽黒山」「雲の峰いくつ崩れて月の山」「語られぬ湯殿に濡す袂かな」とあり○花摘集にも此句見えたり○糸切歯に雜の句の論に云、此句は翁竹亭に傳へられし事、をだまき供養に見えたりとあり。

ぬるゝとぬらすと問答あり

追加

晋子が母追善

卯の花も母なき宿ぞ冷しき

貞享四年の續虚栗に、四月八日身罷りけるに「身にとりて衣かへうき卯月哉　其角」初七夜寢ねかねたりしに「夢に來る母をかへすか時鳥　其角」五七の追善の會「卯の花も母なき宿ぞ冷しき芭蕉、香消え殘るみじか夜の夢　其角、色々の雲を見にけり月澄みて　嵐雪」と三句あり○袂の露に、元祿六年の詞に、はゝき木の七年さきに榎の陰の露と消えしも、とあり。しかれば貞享四年より元祿六年まで則ち七年忌なり。

榎の陰といふは其角が寺二本榎上行寺に母を葬る故なるべし

甲斐山中

山賤のおとがひ閉るむぐら哉

貞享四年の續虚栗に前書とも此の如く見えたり○菅菰抄中

芭蕉年三十九
天和四年改元貞享となる

芭蕉傳に、深川六間堀といふ所に庵をまうけ、天和二年まで在住ありしに、其冬回祿の災に罹り、暫く甲州に赴き、彼國にて年を越え、翌三年夏の末ならんか、深川の舊地に歸る、と見えたり。

さゝれ蟹足はひのぼる清水哉

貞享四年の續虚栗に有り。

發句集貞享元年とす

白芥子や時雨の花の咲きつらん

何れの年の吟にや知らず。

發句集元祿二年とす

郭公うらみの瀧の裏おもて

何れの年にや知らず。曾我物語集に見えたり○按ずるに元祿二年の奥の細道に、下野國日光山の紀行の文に、二十餘丁山を登つて瀧有り、岩洞の頂より飛流して百尺千岩の碧潭に落ちたり、岩窟に身をひそめ入りて瀧の裏より見れば、うらみの瀧と申し傳へ侍るなり、と有りて「しばらくは瀧にこもるや夏の初」の句見えたり。此節の吟にや、しかれども此句見えず。

夕顔に干瓢むいて遊びけり

元祿七年の有磯海集に見えたり。

發句集年號知らずの分

晝見れば首筋赤き螢哉

何れの年の吟にやいまだ知らず。

芭蕉句選年考上卷終

明治四十四年九月二日印刷
明治四十四年九月五日發行

芭蕉句選年考上卷奥付

正價金壹圓五拾錢

校訂者　大野洒竹
同　沼波瓊音

發兌　東京市本郷區森川町壹番地　電話下谷三三一〇番　電話下谷三〇一一番　振替一九四六七番　文成社

版權所有

發行者　東京市本郷區森川町一番地　貞金近松
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登

特約賣捌
東京市神田區表神保町　振替東京二七〇番　東京堂書店
大阪市梅田　振替東京一二八二三番　盛文館
名古屋市本町三町目　振替東京五八〇一番　川瀨書店
福岡縣久留米市米屋町　振替大阪二三五七番　菊竹金文堂

文成社圖書大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　京橋區尾張町	東海堂
同　本郷區大學前	有終閣
同　神田區裏神保町	上田屋
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　京橋區西紺屋町	良明堂
同　神田區錦町	勉强堂
同　日本橋區數寄屋町	六合館
同　神田區錦町	二松堂
同　神田區表神保町	武藏屋
同　京橋區南傳馬町	目黑書店
同　本郷區本富士町	日本堂
同　日本橋區大傳馬町	文林堂

大阪市北區東梅田町	盛文館
同　東區北渡邊町	杉本梁江堂
京都市二條河原町	寶文館
同　佛光寺烏丸	東枝律書房
名古屋市本町三丁目	川瀬書店
廣島市鹽屋町	積善館支店
福岡市博多中島町	博文社
久留米市米屋町	菊竹金文堂
熊本市新町	長崎書店
長野市大門町	西澤書店
長岡市表四ノ丁	目黑書店
弘前市土手町	今泉書店
青森市米町	今泉支店
盛岡市肴町	佐々木書店
秋田市大町	石川書店
札幌區南一條	富貴堂書店
大連市大山通	大阪屋書店
清國遼陽	大阪屋支店

永世不朽の名著

伯爵大隈重信君序文　文學博士三宅雪嶺君序文
子爵秋元興朝君序文　岡谷繁實翁著

見本進呈

歷史中の歷史（新刊）

日本全史

全拾五册

菊判クロース製美本裝釘堅牢全九千餘頁
特價（一册）金壹圓五拾錢
送料内地拾貳錢

每月一册ヅヽ刊行

晩近國史の攻究益精緻の域に進みたるも世上に行はるゝ書籍は教科書若くは學生の參考用として概ね簡約を旨とし眞に國史攷究の參考史料となるもの無し、本書は岡谷翁が畢生の心血を濺ぎ多年の功を積み六千數百部の古書珍籍を參照し神武帝創業の時より王政維新前に至る二千數百年間の事蹟を細大洩さず月を揭げ日を銖して一部の書中に網羅採録せられしものなれば國史研究者に好個の參考史料たるに止まらず一般人士の書齋に缺く可からざる名著なり

好評三版

大隈伯社會觀

菊判假裝本五百頁
正價壹圓參拾錢
送料拾貳錢

大隈伯は世界的人物なり、少くとも現代我國に於ける偉大なる人物なり、其該博なる智識と滔々懸河の如き雄辯とは天下一品と云ふも不可なし、伯は敢て專門の學者に非ず、而も其言ふ所往々學者の云ひ能はざることを云ふ、その一言は以て全國の相場を上下せしめ、その一句は世界の政局に反響す。本書は伯の社會觀なり、政治外交經濟より敎育問題人物月旦等社會百般のこと一として伯の話題に上らざるなく話題に上るもの一として伯が三寸の舌頭に說破せられざるなし

米國トロー氏原著
山縣五十雄先生原著者評傳
文學士 水島耕一郞先生譯
リーチ畫伯口繪

森林生活

好評五版

本書は一面より見れば深刻なる現代生活の批評なり、輕浮にして根柢なき時代を表裏解剖し、辛棘肉を抉り骨を剔す、冷々たる文字、而も諷刺あり、識論あり、記述あり、詼謔あり、人をして一讀卷を措かず、讀むこと再三にして愈々其驚くべく喜ぶべき眞理と興味の友たるを悟らしむ。

トローは哲學者たり、博物學者たり、農人たり、漁夫たり、詩人たり、鉛筆製造人たり、文學者たり、測量師たり、その日稼ぎの日傭人足たり、而して彼は煩雜にして虛僞なる現代生活に背き一挺の斧を携へて森林に遯れ、自ら家を造り、自ら食を調へ、簡易生活を實行すること二年有餘ケ月、靜に現代生活の眞髓を指摘せり、本書は新時代に生活せんとするものの第一の聖書なり福音なり。

四六判總クロース
上製美本六百餘頁
正價金壹圓廿錢
送料拾二錢

無用の苦痛多き現代生活に對する絕好の解毒劑!!

男爵 澁澤榮一君述 立石駒吉君編

好評再版

富源の開拓

本書は議論家の議論に非ず腐儒者流の空論にもあらず奮闘的生涯より生み出したる實際的活論なり

澁澤男は我實業界のオーソリテー也、本書は男が數十年間の公私朝野の奮闘的生涯より得たる經驗と識見より出でたる大なる思想を集めたるものにして實業に志す者は勿論一般國民の必讀すべき良書なり

菊判美本五百頁
正價壹圓參拾錢
送料拾貳錢

稀世の大名著

大好評
大增補

岡谷繁實先生著

袖珍 名將言行錄

各册讀切

全拾册
ポケット入各三百六十頁餘
正價(各册)六拾錢
送料各六錢

本書は著者が千二百五十一部の古文書を參照し拾有六年の心血を濺ぎて成りし稀世の大著述にして其收むる所我國中世戰國時代より德川時代に至る名將英傑の士忠臣勇武の人物百七拾餘名の傳記逸話を詳述せしものなれば本書は一面に於て歷史の側面觀なると共に一面に於ては英雄傳なり殊に其雄健なる筆致と熱烈なる文字とは古英雄の威風凜々たる面影を偲ばしむ

日東 福本誠先生校
和譯
宋名臣言行錄
鈍山 小野應男先生譯

菊判上製美本
正價壹圓
送料拾錢

三版

本書は朱子學の鼻祖朱熹の著はす所、宋名臣の言行を收めて細大漏さず、凜霜烈日の氣、高風明月の節、或は鐵骨稜々として富貴權勢に屈せざるの風、紙上に躍如たり、維新當時近思錄と共に愛國の志士爭つて愛讀せしもの惜むべし爾來世人に忘れらる、今便宜の爲め平易なる和譯成る蓋し得難きの珍書也

文學士 内海弘藏先生著
文章十講
訂正增補

四六判凡六百頁
正價壹圓廿錢
送料貳拾錢

七版

本書は從來坊間に行はるゝ文章作法などとは其趣を異にし内海先生が多年各學校に教鞭を執りしその經驗より新しき講義法を案出し、第一講より第十講迄に分ち、簡より繁に初等より高等に進み、本書一冊にて文章學全體を組織的に解說せり、殊に本書は可成議論を避け實用を專とし、多く作例を揭げたれば學校教師の參考用として又學生の自習用として尤も適當也

伯爵 土方泰山閣下題字
相馬大作
柴田馨君立案
杢左衛門君記述

菊判五百頁餘
前編金壹圓
後編金八十錢
送料各貳十錢

新刊

僅か二十三歲の一青年の身を以て君家の爲め矢立嶺の險に銃砲を擁して津輕侯の歸路を狙ひし豪宕なる勇士の生涯は久しく講談界に檜山事件として喜ばれしが、這回柴田君が最も確實なる材料に依りその血湧き肉躍る痛快なる一生涯を敘傳せり、乃ち梓に上して本書成る

文學博士 芳賀矢一先生序
作文辭典
文學士 高木武先生
小野鐙山先生 共編

四六判美本
正價九拾錢
送料拾錢

三版

◉便利にして重寶なる辭典◉

從來の辭典は徒に古文字を並列して却つて今日必用の文字を缺くこと多く殆ど日常作文の用をなさず、本辭典は今日用ひざる古語廢句は一切除きその代りに最近の字句熟語を漏れなく網羅したれば最も實用的にし重寶なり

加納諸平先生作歌
千勝義重先生校訂
和譯
蒙求
源光行先生譯著

袖珍版美本
正價七拾五錢
送料六錢

再版

蒙求は支那唐代の李翰が廣く故事を選輯して童蒙に便したるものにて而も此和譯は今より七百年前即後鳥羽上皇時代に成れるもの筆路流暢多趣味の名著今や稀の珍本に屬して校訂を施され特に原文對照以て讀誦玩味の便を計れるが故に取つて之を明窓淨机の上に繙き或は以て綠陰薫風の牀上に開かば自ら是れ無二の好伴侶たらん

文學博士 井上哲次郎先生序
青年と禪
東亞の光記者 秋山悟庵先生著

四六判美本
正價五拾錢
送料六錢

再版

禪が精神修養に及ぼす効果の大なるは今更說くの要なし、然かも誤つて參禪に耽溺せば却つて之れ禪覺に墮在し所謂野狐禪者流となる、本書は禪の根本眞髓を解剖し、深く鎖して入り難き禪門の奥義を平易に說述せられたれば修養を重んずる青年は必ず一讀せざるべからず

國民新聞評曰 禪の活動的方面を說き禪機を以て青年の修養に資せしめんと期せり

文學士 沼波瓊音先生著
三紀行
齋藤松洲先生裝幀

四六判美本
正價五拾錢
送料六錢

好評

月山の靈は怪談の如く、十和田湖の月は神話の光あり、遙宮の樂の韻き、志摩群島の翠、いづれか意味の深からざる、本書は著者が得意の紀行文三篇を載せたり、俳文の句、雅文の趣、『紀行文の模範』として讀書界の歡迎せるも宜なる哉

日南 福本誠先生題
文學士 沼波瓊音先生序
文學錦囊
文學士 高木武先生著

四六判美本
正價九拾錢
送料六錢

好評

本書は我國古今の有名なる漢詩、和歌、俳句、川柳、謠曲文、美文、戲曲文、新體詩、狂歌、等あらゆる日本文學の精を拔き、粹を集めたるものなれば誦するによく、讀むに便なるべし、殊に其體裁裝釘の點は諸子が書架の花たらん

7X51
(表)

三版

內藤鳴雪先生題句
寒川鼠骨先生著

贈答俳句集 並に作法

▼祝ひの句 ▼弔の句 ▼送別の句 ▼讃賛の句

◎其他一切社會的の俳句の例を網羅して簡明なる作法を附せり、蓋し俳界の珍書

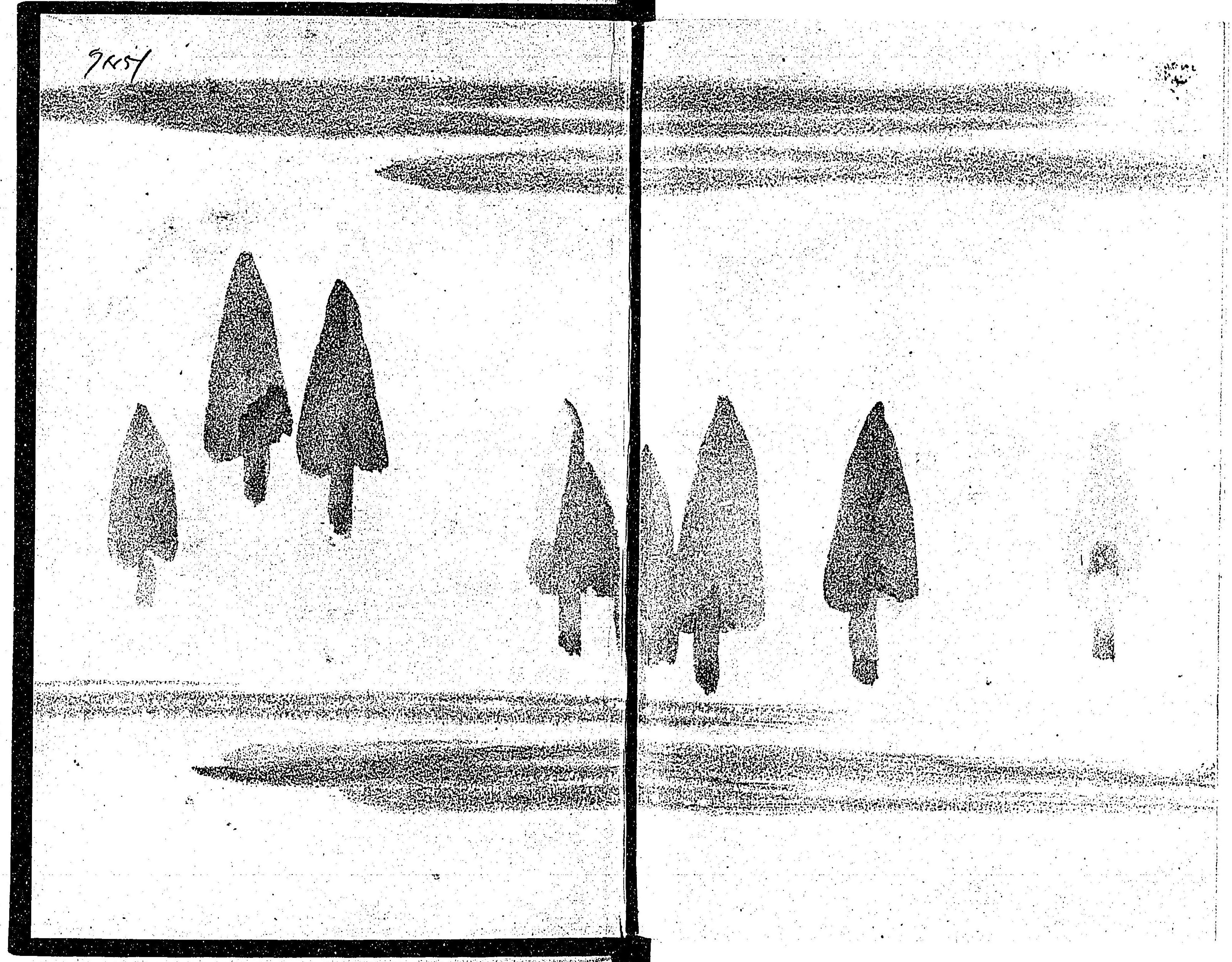
四六版頗美本
正價五拾錢
送料六錢

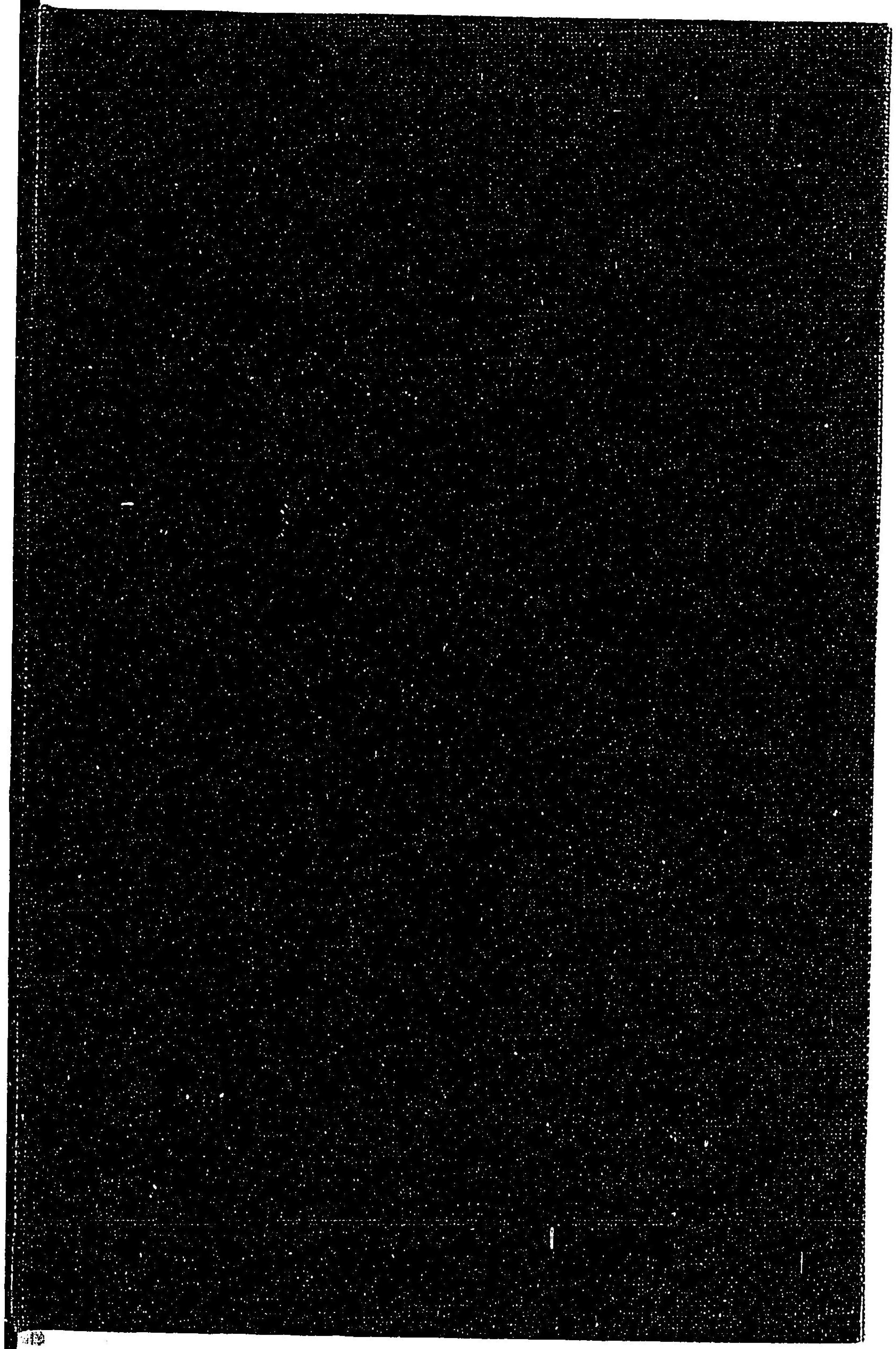
俳味文庫

第一編
文學士 沼波瓊音先生編
短評 俳句選
輕妙なる短評
瀟洒なる裝釘

第二編
六花、碧童兩先生題句 富取芳河士先生編
明治新題 句集
明治時代の新題句はすべて此集にあり

正價各廿七錢 菊半截 送料不要





087482-001-2

911. 32-I642bO

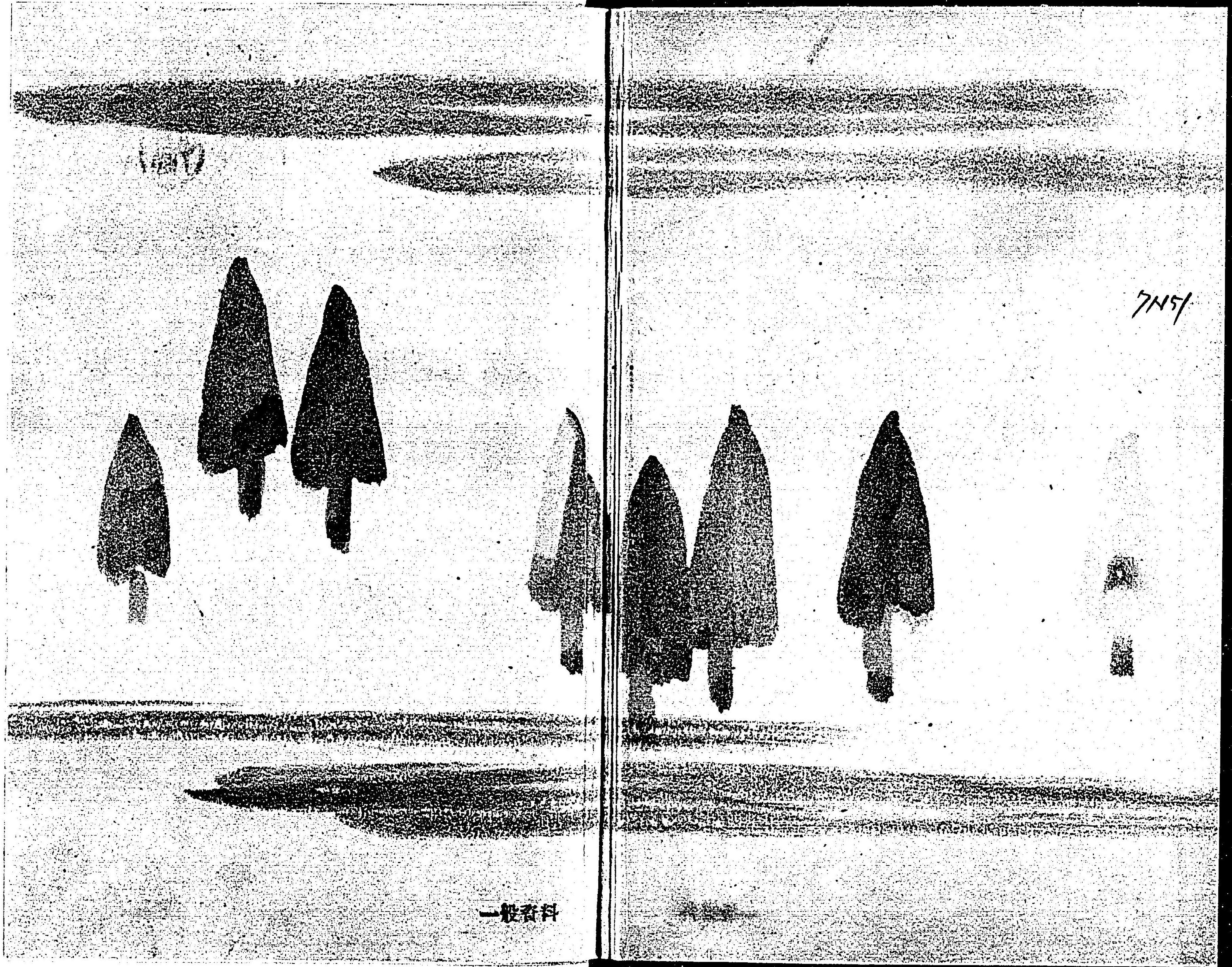
芭蕉句選年考

石河　積翠園／著

上

M44

DBE-0839



7N51

一般資料